

Q 「遺品整理士」とは？

故人が生前に使っていた家具や食器などを仕分ける遺品整理士が注目されている。故人が残した遺品は従来、遺族が整理していたが、高齢化や核家族化の進行で孤立死などが増加。遺品整理を負担に感じる遺族も増え、遺品整理士の需要は高まるとみられている。一般社団法人「遺品整理士認定協会」(北海道千歳市)から県内で初めて遺品整理士として資格認定された鳥谷部剛明さん(34)に仕事の内容や課題について聞いた。

【聞き手・須藤唯哉】

——仕事の内容を教えてください。
 遺品を形見分けにする物や処分に戻す物、リサイクル品として利用です。現在は宮城のほか、山形、福島、岩手の4県をカバーしています。

鳥谷部 剛明さん(34)



とりやべ・たけあき 1977年5月、仙台市生まれ。運送会社などに勤務後、31歳で独立し、ホームページを代行で作成・管理運営する会社を設立。昨年新たに遺品整理業を専門に扱う会社「スマイルライフみやぎ」を始めた。

A 一期一会の思い持つ

——遺品整理士という職業と出合ったのは？

◆1年以上前に高齢者の孤立死に関するテレビ番組を見て遺品整理士を初めて知りました。仕事を始めた当初は右も左も分からない状況だったのですが、遺品整理を扱う先輩

遺品整理士

不当に高額な料金を請求したり、不要品を不法投棄するなど悪質な業者が相次いだことから業界の健全化を図ろうと「遺品整理士認定協会」が昨年9月に設立された。同協会では養成講座を受講し、リポ

に付き添い、いろいろと教えてもらいました。最初は慣れない現場で涙目になったりもしましたが、遺族から感謝されることやりがいを感じました。

——印象に残っていることは？

◆現場では、亡くなる直前まできれいに使っていた台所があったりと、その人の生き様がはっきりと分かり、同じような現場は一つもありません。以前、心筋梗塞で亡

くなった故人を自宅で発見したという親族から依頼されました。仕事を終えた後に届いた手紙に「(変わり果てた)遺体を発見した時の光景を忘れることは一生ないと思います。皆さんのお陰で前向きに生きていく気

——遺品整理で最終的な判断をするのは依頼者ですが、遺品を預かるからには依頼者を裏切ることがあってはいけません。茶わん一つでも生前に使っていた物だと考えるところ。今は遺品整理業だけではなく、弁護士や宗教法人らと連携し、遺言書の作成や生前の遺品整理予約の受け付けなどトータル的なライフサポートをしていきたい。

「人生をサポート」感じた
 聞いて一言
 仮設住宅での孤立死が懸念される中、遺品整理業に関心が高まっている。鳥谷部さんへの取材では「遺族ら依頼者の心の整理もして、はじめて遺品整理士としての仕事

が成り立つ」という一言が印象に残った。力を込めた言葉に遺品を仕分けるだけにとどまらず、「故人や遺族らのライフ(人生)をサポートしていきたい」という強い意思を感じた。

みやぎ
 この人に聞きたい